

☆2月・3月・4月・5月の活動☆

採集観察会のお知らせ

92年度採集観察会 東京都五日市町 「横沢入地区」

第4回 2月21日(日) 10時 雨天決行

●集合地点: JR武蔵五日市線「武蔵増戸」駅 改札口

世話人は新海栄一 (TEL. 0423-21-0289) ・ 笹岡文雄 (TEL. 03-3918-1945)

* * *

93年度採集観察会予定 神奈川県厚木市 「飯山観音」 (総会の審議事項)

第1回 5月15日(日) 10時 雨天決行

●集合地点: 小田急線「本厚木」駅 北口 ●5月上旬発行の通信で再度連絡

世話人は木村知之・高橋祐子 (予定)

総会・例会の案内 期日・所 4月25日(日) 午前10時開会 駒場住区センター

講演と総会と懇親会 世話人は熊田憲一 (TEL. 045-413-3375)

●同封の葉書で出欠・近況(通信に掲載あり)を熊田憲一までお知らせ下さい。

合同例会報告

合同例会は多足類懇談会の主催で盛大に行われた 12月6日(日)

駒場住区センター 司会進行: 桑原幸夫 スライド係: 金野普

(1)午前の講演10:10~12:00

①桑原幸夫「ジムカデの歩脚対数」ジムカデは奇数対の歩脚を持つが、同種でもかなり変異があるものが多い。これまでの報告には対数の記されていないものもあるが、今後の集団解析のためにも対数をできるだけ報告しておくことが望ましい。

②新海明「クモに寄生する冬虫夏草について」クモの冬虫夏草の研究についてレビューした。クモタケがシグモにも寄生するというのは誤りであることは菌学者では常識となっている。クモ関係誌以外に発表の研究を参考にすると、新たな問題も判明する。まず分布調査を計画している。

③西野洋一「コムカデの住む土の深さについての一知見」造成工事で5mも掘ったので、コムカデ等の垂直分布を調べた。草の根が入っていた深さ(4m)まで、コムカデが採れた。5mではダニ・トビムシ・ハサミコムシが採れた。4mのところにいたエダヒゲハシは未知種のようだ。

④笹岡文雄・新海明「第1回クモグッズ大会、その傾向と対策」めいぐるみ・石細工・入れ墨・ブローチ・ペンダント・置物・灰皿・ネクタイ等が持ち寄られた。

(2)主催者あいさつ: 篠原圭三郎

(3)昼食 12:10~1:30

(4)午後の講演 1:30~5:20

⑤池田博明「オーストラリアで見たクモ」1992年の7月下旬から8月上旬に豪州北部を旅した。中央の乾燥地には生き物もクモも少なかったが、アミナゲグモ(メダマグモ科)やボルティアハエトリを運よく観察できた。

⑥篠原圭三郎「ボウニンアカヤスデの生活史」標本を整理すると、小等原産のボウニンアカヤスデは夏の間は親がないことでは本州産のものと同じだが、本州産のものより生活史が、1~2ヶ月早い方にズレていることが分かった。

⑦宮下直「オノゴミグモの生活史と網形質」谷川によって記載された新種オノゴミグモは地表近く(4~5cm)に造網し、年2世代(成体は5月と9月)であることがわかった。他のゴミグモと比較すると、橋糸は短く、やや網は小さいが、粘球サイズは大きい。ゴミグモ(年1世代)と比べてプロジェクトネシスが示唆されるが、その証明には系統関係の説明が必要である。

⑧谷川明男「西表島の自然」西表島は原生林はほとんど無いが、特有な生物やクモも多い。みごとに擬態したクモの数々、分類学的に問題のある種などをスライドで紹介した。

⑨山本祐治「八ヶ岳周辺のキシャヤステ発生状況」(レポート参加)キシャヤステは1年に1回だけ脱皮して成長し、8年周期で大発生する。発生の年にあたる今年の結果を報じた。前回と比べると、今年の規模はそれほどでも無かった。

⑩柄沢新「メダマグモの観察」メキシコ産の飼育中のメダマグモの行動(造網や捕虫)が観察できた。一部はKishidaiaに既報。捕食中に造網する場合もある。

(5)閉会のあいさつ: 莳鳴泉 (6)懇親会(乾杯、自己紹介、懇親会) 5:30~7:00

参加者: 浅間茂、池田博明、梅林力、小沢実樹、小野展嗣、笠原喜久雄、加藤むつみ、金野普、芦嶋泉、木村知之、木村正吾、久保田克哉、熊田憲一、柄沢新、桑原幸夫、後藤好正、小林幸人、小峰、笠岡文雄、貞元巳良、篠原圭三郎、新海明、新海栄一、鈴木成生、高崎祐子、谷川明男、新島渉子、西野洋一、細守有紀、原山紀夫、平松毅久、前川隆敏、宮下直

同定会 神奈川県立青少年センターで、12月20日(日)に実施した同定会「野外で一瞬でクモを同定するコツ(中)」には、10名の方が参加されました。次回は3月13日(日)10:00~に同じく青少年センターの「科学相談」事業として、「野外で一瞬でクモを同定するコツ(下)」を行います。できれば、科学課・池田まで電話で、申し込んで下さい(TEL. 045-241-3131)。申し込みをしなくとも参加可能です。サラグモ・ハエトリグモなどを取りあげる予定です。

出版案内 「週間朝日百科・動物たちの地球」第82号「昆虫・クモ篇」(朝日新聞社)

1月24日号として発売(実際の発売日は1月12日でしたが)された。定価は520円。1年前に既に原稿の〆切だったという待望の一巻。小野展嗣・吉田真・遠藤知二・宮下直・佐々木健志・新海栄一・藤井靖浩・西川喜朗・国見裕久・下謝名松栄・青木淳一・鶴崎展戸の各氏の解説はたいへんコンパクトに現代のクモ学の状況を紹介している。執筆者の写真のはか、新海栄一氏の傑作写真、小川宏・栗林慧・海野和男・今森光彦・渕和雄・難波由城雄各氏の見事な写真が誌面を飾っている。この類の本はすぐに店頭から消えてしまうので、今のうちに買い求めるをお薦めする(池田記)。

●中平清『続クモのふるまい』(著者自刊、1500円)

名著『クモのふるまい』の続刊。中平氏の長年の観察記録から精選された内容は、他者の追随を許さない豊富なものである。

購入ご希望の方は中平氏に直接照会されるとよい。東京方面では、合同例会で熊田氏が持参した分は完売してしまった。新海明氏が、まだ数冊お持ちのはずである。

編集部からのお知らせ 原稿をお待ちしています。

- 会誌編集: 〒223 神奈川県横浜市港北区新吉田町1523 谷川明男
 通信編集: 〒258 神奈川県足柄上郡大井町余手1099 池田博明

『1992年度、クモ学10大ニュースを募集しています。自薦・他薦でお寄せ下さい』

参加者（50音順）：阿部代始子、大石和美、大石洋人、笠原喜久男、加藤むつみ、木村あげは、木村正明、木村美子、久保田克哉、熊田憲一、笛岡文雄、新海 明、新海栄一、鈴木茂生、高橋 登、谷川明男、長井芳夫、長島忠義、中島晴子、成田和子、成田ヨシ子、浜路久徳、伴 満吉浜 隆、牧原くみ子、山川 守
(26名)

キノボリトタテグモ、ジグモ、ヤマトガケシグモ、マネキグモ、カタハリウズグモ、ミヤグモ、コマツエンマグモ、ユウレイグモ、ツリガネヒメグモ、ヒメグモ、オオヒメグモ、シロカネイソウロウグモ、トビジロイソウロウグモ、オナガグモ、チリイソウロウグモ、フタオイソウロウグモ、ヤリグモ、カニミジングモ、ムラクモヒシガタグモ、バラギヒメグモ、ヒロハヒメグモ、ムナボシヒメグモ、ハイイロヒメグモ、ハラダカツクネグモ、デニツツサラグモ、アショレグモ、テナガグモ、ヤマトケズネグモ、クスミサラグモ、アシナガサラグモ、ムネグロサラグモ、ヘリジロサラグモ、ユノハマサラグモ、コテングヌカグモ、センショウグモ、ヨリメグモ、ナンブコツブグモ、ハツリグモ、キザハシオニグモ、ヌサオニグモ、イシサワオニグモ、ヤエンオニグモ、トガリオニグモ、コゲチャオニグモ、ヤマオニグモ、オニグモ、カラオニグモ、ハナオニグモ、コガネグモ、ナガコガネグモ、コガタコガネグモ、トリノフンダマシ、オオトリノフンダマシ、ギンメッキゴミグモ、ヤマトゴミグモ、ヤマゴミグモ、ゴミグモ、ヨツデゴミグモ、ヤマトカナエグモ、シロスジショウジョウグモ、コガネグモダマシ、メガネドヨウグモ、ジョロウグモ、ドヨウオニグモ、ヤミイロオニグモ、ワキグロサツマノミダマシ、サツマノミダマシ、ズグロオニグモ、サガオニグモ、カラフトオニグモ、ヤマジグモ、ヒメアシナガグモ、オオシロカネグモ、コシロカネグモ、キララシロカネグモ、アシナガグモ、ウロコアシナガグモ、ヒラタグモ、クサグモ、コクサグモ、ヤマヤチグモ、アズマヤチグモ、メガネヤチグモ、ハタケグモ、スジブトハシリグモ、スジアカハシリグモ、イオウイロハシリグモアズマキシダグモ、フジイコモリグモ、ミナミコモリグモ、ウズキコモリグモ、ハリゲコモリグモ、クリチャササグモササグモ、カバキコマチグモ、ヒメフクログモ、ツルサキフクログモ、コムラウラシマグモ、ネコグモ、イヅツグモ、シボグモ、キハダエビグモ、アサヒエビグモ、ヤマトヤドカリグモ、シャコグモ、コハナグモ、クマダハナグモ、アマギエビスグモ、ハナグモ、ワカバグモ、アズチグモ、トラフカニグモ、セマルトラフカニグモ、ヤミイロカニグモ、ネコハエトリ、マミジロハエトリ、コジャバラハエトリ、ヤハズハエトリ、オスクロハエトリ、ヤサアリグモ、アリグモ、チャイロアサヒハエトリ、デニツツハエトリ、カラスハエトリ、アオオビハエトリ、ムツバハエトリ

以上126種

* 当日、ムツボシオニグモと記録されたものはハナオニグモとした。

第2回(7月19日)採集観察会の追加

フタオイソウロウグモ、イナダハリゲコモリグモ、コガタコモリグモ、コウライササグモ、ヒメフクログモ

この追加で確認種は98種及び未確定5種となります。

笹岡文雄

本邦初、というより世界初のクモグッズの披露大会が、昨年(1992)9月19日(土)目黒区駒場住区センターにて開催されました。個人々々が蒐集しながら、思わず秘蔵してしまっているクモグッズをテーマにした諸々の物品を一堂に集めました。

もちろん一口にクモグッズといつても、小はアクセサリーから大はぬいぐるみまで千差万別、この日集まつたものは50点を超みました。人によってはその品々で大荷物になってしまわれたのに、こころよくご出品いただきました。

当日は参考いただいた方々によるグッズの曰く言われ、蘊蓄を傾けたグッズの披露をおこないました。

日本製より外国製のものが数多く出品され、かつまたそのセンスもいいようです。傾向としてはクモまたは住居(特に円網)を純粹にデザインとして利用したもの、そしてクモのクロテスクを強調したものの二つに大別されいるようです。これは日本製外国製どちらにもいえるようで、あまり差はないようでした。また品物はクモそのものおもちゃ、装飾品、とそのデザインがついた各種のものにはほぼ三分されました。

特に参加者全員を感嘆させたのは、八幡明彦さんにお持ちいただいたタイ国製クモのぬいぐるみでした。それは体長50cmで全体のバランスもさることながら、歩脚の分節から目の配置、爪まで再現され忠実な観察で再現されました。

考えてみればこの企画は真にカルトなものでしたが、当日は世話人が考へていた以上の多数の方々にご自慢の品々をお持ちよりいただきました。今後も懲りずに二度め三度めと、回を重ねていきたいと思っております。その折りはまたみなさまのご理解ご協力と、新たなグッズが多数蒐集されていますよう願っております。

尚、会について詳しくは後日まとめたうえで、Kishidaia に投稿する予定であります。

世話人：新海 明、笹岡文雄

参加者（50音順）：梅林 力、小野展嗣、加藤輝代子、加藤倫之、加藤むつみ、萱嶋 泉、木村知之、熊田憲一、小池牧子、小峰光弘、高橋祐子、谷川明男、中島晴子、萩本房枝、布施佳子、八幡明彦

(18名)

92.9.21 読売新聞 平松敏久 撰稿

ワシントン大 学で、修道女 会が基金集め 用に売り出し た「スパイダ

海外短波

1.ハット

なへだぞうです。奇てら つたデザインが受けたの

か売れ行きも上々で、集 まつた基金は三十四もの獎

学金に役立てられるとのこ と。クモだけに、狙つた相 手をからめどるのは得意技 といったところでしょう

が、実はこれ、シナジーです (写真はAP)。

クモの巣が張りめぐらさ れた帽子からソロリソロリ と降りてくる一匹のクモ。 それに続く女性の悲鳴が。 それのホラー映画のひとコ マかと思われるシーンです

海外短波

「だんわ会」を始めます

今から25年前になるようですが、東京蜘蛛談話会の代表の蓑鳴先生のお宅で毎月1回、クモ好きの学生を中心となり会合がもたれていました。この会合が発展して東京蜘蛛談話会となったことは多くの皆さんご存じかと思います。当時のその集まりの様子は断片的ではありますが、会誌「KISHIDAI」の中に記録されています。採集会の計画や報告、自分が何をやりたいのか、またどんなことを調べているかなどざくばらんな情報交換の場であったことが判ります。談話会の原点は正にここにあったのでしょうか。

1992年現在で会員数は170余名に達したとのことです。「KISHIDAI」も「談話会通信」も順調に発行されています。合宿や採集会そして、例会なども毎年満席なく実施されています。参加者もたくさんになりました。特に最近は年配の方々の頑張りが目につきます。会としては順風満帆なのかもしれません。けれども、こんな時だからこそ私達はもう一度、東京蜘蛛談話会の「原点」に立ち戻ろうと思います。会の年齢をいくら数えても、初めて参加される方々のクモに対する疑問などはあまり変わらないはずです。クモに興味を持つ全ての人たちの集う場として、再び「だんわ会」を始めようと思います。ここでは、自分が見たこと、考えたこと、何をしたいのか、どうすればよいのかなどクモに関するあらゆる情報交換を気軽なくざくばらんに話あいたいと思います。会員の皆さんのお集いのご参考をお願いします。

「だんわ会」へ参加される方は準備するものなどはありません。「聞きにきただけ」の人も歓迎します。

今後の日程：2月21日
(1993年) (採集会の当日)

3月未定

4月25日

(例会・総会の当日)

*詳しくは、木村知之・篠岡文雄・高橋祐子・平松毅久までご連絡下さい。

環境を診断するジョロウグモ

さわやかな秋風が吹くころ、ジョロウグモの鮮やかな姿がひときわ目立つ。背面は黄色と緑青色のしま模様、腹部の横に赤い斑紋がある大きいクモが雌。その上にいる地味な色の小さいクモが雄である。

このクモは姿だけではなく、細かいへん美しい。

黄金色に輝く網は、中央に馬てい形をした円網と、その前後に不規則な補助網が張られ、横から見ると三重になっている。また、足場の間に五~六本ずつ張られた横糸が、まるで楽譜の五線のように見えるのが特



(173)

久居 宣夫

ひょろに、ジョロウグモの一生を通してみると、高木だけではなく、低木や草もよく茂った林に多く生息しているのが分かる。

ジョロウグモは昆蟲、特に飛行性昆蟲を主なえさにしている。したがって、このクモが多く生息している地域に飛んでいく昆蟲も多く、豊かな自然があれば、その地域で飛んでいる昆蟲が多いともいえる。それ

微だ。

ジョロウグモは、ふつう人家付近や都市の公園で、明るく開けた木立の空間を利用して大きな網を張る。

もうとも、子グモのときは網も小さいので、明るく広い空間を必要としない。むしろ、うつそりとした茂みの間に五六本ずつ張られた横糸が、まるで楽譜の五線のように見えるのが特

例え、東京の公園で、ジョロウグモの数を調べたところ、自然状態がよく保

てある程度判断することもできるのだ。

毎日新聞(夕刊)

篠岡文雄(提携)

(次頁下段へつづく)

中国紀行1

日中合同の洞穴調査ということで一昨年の春と秋のそれぞれ2週間ほど中国を訪れ、いろいろな点で私は強い衝撃を受けた。以下はその覚え書きである。
前途多難

旅はトラブルから始まった。天気が悪いわけでもないのに、中国民航の飛行機が大阪空港にやってこないのだ。カウンターに訊ねると、中国民航ではよくあることだという。結局3時間半遅れて離陸。

まずい機内食を食べてしばらくすると、何やらぼそぼそと機内放送。声も小さく、中国語かと間違うような英語で、まったく分からず。突然ドーンとすごいショックがあり、上海に着陸していた。たしか北京直行と聞いていたのに！華僑の旅行業者から信じられないほど安い切符を手に入れた報いか？

第2のトラブル

4時間遅れて、午後11時北京着。深夜にも関わらず岩溶地質研究所の王福星さんらが出迎えてくれた。さすが気の長い民族である。謝謝！タクシーでキャピタルホテルへ。そのホテルにある中国の旅行業者から翌朝の汽車の切符を受け取る手はずであった。

しかし、それらしい人はいない。待ちくたびれて帰ってしまったのか？フロントに聞くと、そんな会社はこのホテルにはないという。電話をかけてみたが、深夜であるからだれも出ない。

このホテルは一泊100ドル（=1万5千円）というので、もっと安いホテルへ。別のホテルに泊まっている王さんに電話して事情を話す。つたない英語での電話の交渉はひどく疲れる。

当然ながら安眠できず。翌朝キャピタルホテルに行くと、フロントが全員で私たちの切符の手配をしている！後で分かったことだが、中国の人民代表委員である王さんが朝早く来たらしい。まさしく鶴の一聲！

待っている間にキャピタルホテルの一室を無料で使わせてもらった。考えてみると、昨夜からなんにも食べていない。ホテルの朝食バイキングはひどくおいしかった！

濟南へ

ともかくもその晩の切符をとってもらい（われわれがやると、切符の予約に3日かかるそうな！）、22時北京発。駅は広く暗く、人であふれている。頬がこけ、ぎらぎらした目をした入たちがたくさん、駅の構内に座り込んでいる。みんな汽車を待つ人たちで、終戦直後の上野駅のかくありなんと思われた。

夜行列車で7、8時間。山東省の首都、濟南へ。ここで1ヶ月ほど前に中国入りしていた立命館大学探検部（私はその部長！）の先発隊と落ち合うのである。だが、またまたトラブルが待っていた。

前負下段
よりづく。

シヨロウクモの雄（上）と雌（下）＝撮影・筆者



たれている縁地ほど、クモの密度が高い傾向がある。
一方、たとえ面積が広くて
木と下草だけという
ような単純な林や人為的な
影響が強く、えさの昆虫が
少ない公園では、密度が低
いが全くないなどのこと。
クモはとがくから嫌わ
れがちだが、環境を診断す
るバロメーターとしての役
目も立派に果たしている。
(国立科学博物館附属自然
教育園)

トラブル第3弾

やっとのことで山東省の省都・濟南に着いた。人口二百万人という。来るはずの出迎えがない！トラブルがあったときは連絡せよと、濟南地震予知研究所の電話番号を教えてもらっていたので、さっそく電話をしようと思ったが、なんと中国には公衆電話がないのである。

ホテルの電話を借りようとしたが、駅の近くには見あたらない。タクシーに乗ろうかと思ったが、むちゃくちゃな運賃をふっかけてくるので断念。駅前で買った市内の地図を頼りに大きそうなホテルを1、2軒訪ねたが、なんとホテルに電話がない！重い荷物を背負って、朝飯も食わずに何キロも歩き回り、われわれはもうギブアップ寸前であった。

窮すれば通ず

同行した尾島君は立命の学生で広東語は少し話せるのだが、濟南ではほとんど通じない。仕方がないので銀行に飛び込んで、おばちゃんに電話を貸してくれと頼むが、私の英語も尾島君の中国語もまるでダメ。そこで絵を書いたり身ぶり手振りをやってみると、これが通じたのだ。

しかし、守衛室から電話をかけたがまるで通じない。もう頭に来た！市内の地図を出し、地震予知研究所の住所を見せて、この地図に丸を付けろと言った。もちろん日本語で。守衛はためらいなく丸を付けた。なんとすぐ近くではないか！！

研究所には英語を話せる人がいて、立命の先発隊がいる地質鉱産局の人民招待所に連れて行ってくれた。謝謝。日本を発って3日目で、やっと合流できることとなる。不吉な予感。

活動開始

先発隊は1ヶ月ほど前に来中し、ラオス国境に近い廣西省で洞窟調査を行い、二三日前に濟南入りしたばかりであった。暑いところから寒い山東省に来たので体調を崩し風邪を引いている者も多かった。私が持参した梅干しやイカの塩辛はあっという間になくなってしまった。

向こうの食事は辛くて脂っこいものが多く、蛙や蚕のさなぎなども出た。私は東北の田舎育ちだから何でも食べるけれども、学生たちは辟易したらしい。だらしない。一般人ならともかく、探検部が現地の食べ物が食べられないとはどういうことか！

学生たちはおじさん・おばさんと付き合うのも苦手なようで、中国語は多少は話せるはずなのに自分から話しにいこうとしない。困ったことだ。中國の人たちと一緒に会食したとき、一言づつ中国語で挨拶しようと強制したら、「マーボ豆腐！」といった馬鹿者もいた。

翌朝、4日目にしてやっと活動開始。歩行者と自転車でごった返す道路を縫うように、われわれを乗せた車は猛スピードで洞窟調査に向かった。

便所閉口

中国人はお茶が好きだ。茶碗にお茶の葉を入れて湯を注ぎ、そのまま飲むから当然葉が口に入る。のべつお茶を勧められ、お腹はジャブジャブ。もう車に3時間も乗っているから、トイレに行きたくて我慢できない！

公衆便所で車を止めてもらう。うわさに聞く中国の便所である。「小」の方は何ということもないが、「大」の方を見て驚く。「小」と同じように長い溝があり、その両側に足を置いてしゃがむようになっている。そして、ドアはない！！男たちが2、3人、お尻を出し、タバコをのんで談笑しながらしゃがんでいる。写真をとろうと思ったが、国際問題になるのも嫌だからやめておいた。男と女の便所はもちろん仕切られてはいる。

外国人宿泊専用のホテルには「ちゃんとした」便所があるが、中国人用の便所はみんなこんなものである。外国人特に女性はつい「大」を我慢してしまい、便秘になるという話を聞いた。

効率的運用？

飯店で昼食。餃子やら肉まん、それに名前も知れぬお皿が並ぶ。とても食べきれない。我々が席を立ったとたんに、隣のテーブルに控えていた男が二人、我々のテーブルに殺到した。いかにも浮浪者風の、垢じみた身なり、バラバラの髪。

男たちはガツガツと異様な迫力で、あっとゆう間に我々の食べ残しを平らげてしまった。店の者は慣れているらしく、彼らが食べた後でおもむろにお皿を片づけはじめた。こういうところにも、中国の実利主義がかいま見える。12億人が生きていくための中国人の生活の知恵、というのは考えすぎか？

朝陽洞

やっと目的地に着く。ここには全長数キロという、かなり大きな洞窟があるという。その朝陽洞に入って、がっかりした。観光客が歩きやすいように床面は削り取られてコンクリートの通路となっている。鐘乳石や石筍には赤や青のベンキが塗られ、照明に光っている。

我々が採集しようとした洞窟にすむ小動物にとっては、まさに悪い場所である。彼らは、コウモリの糞などの有機物がたまたま、湿った床面が好きなのだ。予想通り、ヤスデ、クモ、カニムシ、コヨリムシなどは非常に少ない。

案内人のおじさんには、人の入ったことのない支洞に連れていってもらった。垂直の壁が登れず、私は早々と断念したが、学生たちはおじさんについて、ほとんど腹ばいで1キロほど奥まで行ってきた由。

なんとこのおじさんは、ヘルメットもヘッド・ランプもつけず、背も立たぬ暗闇の中を先導したそうな！たぶん、岩や壁の位置をすべて覚えているのだろう。

中国人は怠け者？

中国の朝は8時から始まる。役所、会社（公司）、すべてそうである。我々遠征隊は8時半頃に宿舎を出発し、実際に洞窟にはいるのはいつも10時頃であった。当然ながら、すぐにお昼になる。昼食がまたゆっくりして、近くの食堂で2時間はたっぷりかけて食べる。

午後の調査を始めてしばらくすると、もう帰ろうと言う。我々が日本で調査するときは、数時間連続して洞窟に潜っていることが多いから、物足りない。宿舎の夕食に間に合わないと言って、我々をせかすので、仕方がないので帰ることにする。

夕食は6時。どんなに遅くに行った日も、この時間には帰ってくることになってしまった。夜は手持ち無沙汰で、何もすることがない。テレビで洋画を見たが、中国語で吹き替えており、分かったのは一言「ウオ・アイ・ニー（I love you）」であった。

こんな風に毎日が過ぎて行くのはたまらないで、昼は弁当にしてもらう。15分ほどで食べてしまい、我々はすぐに洞窟に。中国チームがこないのでどうしているかと思ったら、車のなかで昼寝をしていた。

万事がこんな風にゆっくりしている。日本に国際電話をかけようしたら、ホテルの女の子が「電話が故障しているから今日はダメ」という。次の日に行ったら、「今日もダメ。明日は大丈夫だろう。」

当然にならないので、郵便局から電報を打つことにした。英語の電文を見せると、係のおばちゃんが目を丸くし、一字一字これはa、これはbなどと確認する。この作業で1時間ほどかかった。もういいかと思ったら、今度はすべての文字を大文字に直せと言う。また一からやり直し。何をやるにも半日・一日かかるのである。

夜がひまなので、日本に絵はがきを書く。おもしろ半分に、漢字だけを作つてインチキ漢文を書いた。いわく、「中国便所閉口。中国人皆怠者也。」云々。中国チームのメンバーが、投函してきてやると言うので渡すと、私の目の前でじっと読んでいる。ギョギョ！

プライバシーに関する考え方方が我々とまるで違うらしい。まあ葉書だから、読まれても仕方がないとは言うもののー。面と向かってはさすがに言わなかったが、次の日にうちの学生をつかまえて、「中国人は怠け者だと思いますか？」と訊ねたららしい。

どっちが異常？

中国を訪れた人の半数は「もう二度と行くものか！」と言う。しかし残りの半数は「もう一度行きたい」と思う。私は当然後者である。中国のゆっくりリズムが気に入ってしまったのだ。

家族で食べる夕食の時間はきちんと守る。昼寝する。汽車は時間どおりに発車しない。待ち合わせの場所は指定できるが、時間は指定できない？今日の仕事は明日に延ばせ。

こんな風でともかくも「世の中がまわっている」のは、私には新鮮な驚きだった。

(4)

清澄だより (2) 久留里線の車窓から

・新海 明・

房総半島のほぼ中央を北西から南東へ向かって走る久留里線は、JR内房線の木更津駅を起点として上総亀山駅に至る延長30数kmほどのローカル線である。私が初めてここを訪れたのは1972年の晩秋であった。車窓外に広がる刈田や畑、その中に点々と柿の木が赤く熟した実をつけていたのが印象的だった。それから20年余り経ち、木更津周辺の祇園や上総清川などの駅舎辺りは東京近郊の他駅と同様で都市化の波に洗われ、ずいぶんと変貌してしまったが、房総の内陸の駅の多くは昔のままの姿を今に残している。特に、久留里駅から先の平山、上総松岡、そして終点の上総亀山の3駅のたたずまいを私は好んでいる。駅舎の境界が明瞭でなく、下車した人々はてんでにホームから散っていく。亀山を除き無人駅である。私がいつも乗車する、木更津を午前11時54分に出発する気動車は一両編成。さながら老人ホームごとき感もあるが、途上より黒い学生服の群れも乗り合わせる。親戚やら隣近所の人たちがそこかしこで挨拶を交わしている。部外者の私さえも何かホッとさせられる雰囲気がある。席の詰めあい、席を譲る女子学生。かつて、私達の身の回りでも見られたはずの光景がここにはまだ残っている。人々は都会とは違うゆったりとした時の流れの中で生きているかのようである。

房総半島は早稲田の産地である。5月になれば田んぼは早苗で埋め尽くされる。苗間を走る青空のすがすがしいこと。梅雨は早苗を一気に成長させて田んぼは緑で一面に覆われる。夏、7月ともなれば稲はひっそりと花を咲かせる。やがて穂の中に乳白色の液を満たし、8月の下旬ともなると黄金の穂先を垂れるようになる。水田の周りの椎や楠にさす光が木々の陰影を濃くすれば、秋はすでにすぐそばまで近づく。そして、畔に朱色の花群が突然出現する。蔓珠沙華はいつも唐突に秋を連れてくる。刈り取られた田は稻藁を焼く煙をたなびかせながら、長い冬の眠りにつく。暖かい房総でも冬になれば雪が降る。時雨のような雪が。そして、瞬く間に消えてしまうが・・・・。車窓からの時のうつろいは毎年毎年、どれだけ見ても見あきることはない。時は無限に流れ、その中で季節は確実にその印を刻みつけながら回転する。

冬の清澄山でも、暖かい日差しがあればクモたちは結構活発に動いている。シロカネグモ類の幼体は小さな水平円網を張ってその真ん中にとまり餌を待っているし、木々の枝先にはクスミサラグモの皿網があり、クモは枝に張りつくようにとまっている。体色は少し赤みを帯びている。常緑樹の葉陰にはユノハマサラグモが浅いドーム網を張っている。これらのサラグモ類は寒い冬を亜成体で越し、春になると一齊に親となって子作りに励む。それに対してシロカネグモ類は小さな幼体で越冬し、その先に長い季節の試練が待っている。そして、ジョロウグモの子達は暖かな網の袋の中で長い眠りについている。

12時55分。さて、亀山駅に着いた。今日はどんなクモたちと出会えるのだろうか。



近況報告（1992年12月の合同例会はがきにて）

上原 健：談話会の皆様に是非、野鳥公園にお越しいただきたいと思います。この6月には、谷川先生がオビシガバチグモの雄を発見されました。

佐藤 幸子：すっかり老化してしまった87才の母をかかえていますので、今後はどこまでも出られませんし、何も出来なくなりました。御無沙汰が続くと思います。何卒よろしくお願い致します。

佐藤 尚子：仕事の都合がつかなくて、残念なのですが欠席させていただきます。

古川 渉：合同例会は欠席いたします。

八木沼健夫：退職以来心身の休養につとめていましたが、体調を戻しつつあり、冬眠を終ったらまた勉強を再開します。クモ学会の大会も2年欠席しましたが、来年は大阪なのでぜひ出席するつもりです。久しぶりでみなさんにお会いするのを楽しみにしています。研究していくなくても結構毎日のようにクモに関する仕事があります。中国で（蝶形学会報）Acta Arachnologica Sinicaと似た名の雑誌が出ているそうです。まだ入手していませんが、1~2冊刷りはもらっていますが、詳しいことがわかれれば、なにかで紹介します。

中平 清：・談話会通信No. 76に載せられています「雲見合宿報告」を楽しい想像をしながら読ませていただきました。・小生は数年前から、「耕さず、肥料は施さず、農薬除草剤は用いず、草や虫を敵としない、生命の営みにまかせた農」を実践しておられる川口山一さんの真似をして野菜作りをしていますが、今年からは更に、野草を野菜の仲間に加えています。その野菜の代表格は、海浜植物であるツルナ（ハマジシャとも言う）と近年気化した雑草のベニバナボロギケで、大いに賞味しています。こうすることで、草も虫（クモを含む）も人間も依存しあって未長く生きてゆかれるのではなかろうか、と思い、自然を守る運動をしている人々のお手伝をしているつもりになっています。

・皆さんのが機会をつくられて、室戸岬あるいは足摺岬方面での合宿観察会を行なっていただければ有難いな、と思います。この方面は未調査地帯同様のように思います。若い人達の活躍大いに楽しみです。

東條 前：今回も失礼さしていただきます。皆様方によろしく。

田中 総久：欠席します。

朝倉 幹晴：合同例会に欠席します。

入江 照雄：松本大会では、大変お世話になりました。今後の連絡等は自宅の方にお願いします。

田中 総久：一度参加せねばと思いつつ、今年もまた欠席します。皆様方によろしくお願いします。

松田まゆみ：北海道の十勝では、今、土幌高原道路の工事再開が大きな問題になっています。この道路は、大雪山国立公園の然別湖と土幌町を結ぶ道路で、自然保護団体の反対により、2.6 kmの未開削区間を残して、20年間工事が中断されていました。この付近は、大変特異な生物分布が見られ、ナキウサギの一大生息地になっている他、コマクサなどの高山植物や高山性昆虫が低標高でありますながら分布しているところです。クモでは、標高800m位の所にタカネコモリグモが生息し、ニワオニグモやヤマキレアミグモも多い所です。道は、アセスを実施し、すぐれた自然であることを認めながら、強行に着工しようとしています。秋から測量調査が始まり、反対運動もいよいよ大詰めになってきました。

海老原憲昭：毎年クモを観察していた林が、今年はマンション建設現場に変わってしまいました。わ

●「脱皮時期の見分け方と飼育上の意義」加藤むつみ：（通信に投稿されました、要旨を紹介させていただきます（編集子））

KISHIDAIAG3号の前川・池田両氏のハエトリグモの脱皮の兆候を読み、良く観察すれば、クモにおいても、脱皮前に脱皮時期をあらかじめ見分けられることを知った。カブトガニの脱皮中にも、同様な色の変化が見られる。カブトガニはハエトリグモほど多毛でないため、足だけでなく、背甲でも変化を観察できる。△（次頁下へ）

すかに残った林も、下草を刈ってきれいになってしまいました。そのうちここも家が建ってしまうのかと思うと、寂しい気がします。・・・7月・10月の採集観察会は学校や子供会の行事と重なってしまい行けませんでした。2月はなにも行事がありませんように、と祈っています。

鶴田 順一：談話会の採集会が巾着田で行なわれた時には私のやきとり屋に来てもらい、久しぶりにクモを身近に感じました。今度、9月から「おこのみ焼き」の店と同じ飯能で出したので、ますますクモ・多足の世界から離れていきそうです。皆様の活躍を陰ながら応援しています。

藤井 緒浩：合同例会に欠席します。

鶴崎 晃巨：合同例会に欠席します。

木庭 奏：合同例会に欠席します。

大熊千代子：学会ではお世話になりました。増えレベルアップ、実のある発表に大いに感動いたしました。また帰福してActa Arach. 41 (1) を受け取って、大論文に感動いたしました。その後9月いっぱい雑務に追われていましたが、合同合間に谷川さんの別刷りを机上において「ゴミグモ」の大整理。今まであいまいだったものが片端から明らかになってとても良い気分です。あと数本を残すのみになりました。来年の合同合宿には参加したいと思っております。

古沢 美子：9月19日の「スパイダーグッズ」大会も楽しみにしていたのですが、仕事（農業・・・お米を15haほど稲刈りし、乾燥調整までやります）のやりくりが全くできません。参加できませんでした。最近私の住んでいるこんな田舎にも「自然」の減少が目立ってきてています。一人でも多くの「ナチュラリスト」を育てたいと、自分の子供（小6、小4、小1）からきたえている貴重中！そのうち子連れでうかがいたいです。

福島 彰人：ご苦労さまです。いつも講読会員ですみません。秋田のクモは、もう越冬準備。晴れた無風の午前11時ごろには空を飛ぶ仔グモがにぎやかです。成体も良く飛びます。

千国安之輔：少し体調を崩していますので、欠席します。でも、夏の日本蜘蛛学会第24回大会が、松本市で盛大に開催され、出席できたことは、誠に生涯の喜びでした。これは、偏に東京蜘蛛談話会の実行委員の方々の並々ならぬ御協力のおかげと存じ、深く感謝・感激しています。（No. 76. p. 2. H. I. 記の通り）本当にありがとうございました。

井上 尚武：こちら、今年の7月下旬に福島県浪江町周辺の海岸を調査しましたが、護岸工事が進み、自然海岸が消えつづり、イソコモリグモは見つかりませんでした。昨年宮城県では巣穴らしいものは見つけたのですが、採集はできませんでした。今のうちに各地の海岸を調査する必要があります。

近藤 昭夫：今年は学会で話してしまったことですが、東京蜘蛛談話会のメンバーの多くは松本へは行っていないと思いますのでBrisbaneの話でもと考えていたのですが、多忙にてまた欠席せざるをえないことになりました。皆様によろしくお伝えください。6月に完成した動物舎の一角でジョロウグモの雌を飼っています。設備がよくなつたので給餌そのほかの世話を行き届いたためか、この時期になってもよく産卵します。おかげで毎日世話をしなければならない期間が例年より長く、あと半月はかかりそうです（欠席理由の①）新動物舎は500mほどあります。クモの小室は大丈夫でしたが他の部屋の主として空閑のトラブルが10月に続出し、この2ヶ月はその対策に振り回されASJの事務局の仕事を停止せざるを得ず、例会当日は会務報告の原稿作りの予定です（欠席理由の②）。

△ 旧皮内に閉じ込められたまま成長して、表面積が増えた新皮が、折りたたまれ、縮んだ状態であるために、見かけの色の濃縮（つまり黒ずみ）がおきるのではないかと思う。新皮が折りたたまれている状態は、カブトガニでは脱皮時に肉眼でも観察できる。

自然界で脱皮殻から抜けきれずに死ぬ例を、観察経験の少ない私でも見ていることからすると、脱皮という行為はかなり危険を伴うものようだ。（次頁下へ） ↗< M. KATO >

新海 明：1993年6月～7月に冬虫夏草（クモタケ）の一斉調査を計画しています。会員の皆さんの御協力をお願いできれば幸いです。

小澤 實樹：やっと涼しくなり、いくらか日がさめてきました。

鈴木 成生：合同例会に出席します。

池田 博明：合同例会に出席します。娘（泉）も合同例会で発表させます（演題「冬のヒメグモ、春のヒメグモ」）ので、よろしくお願ひします。（泉さんはテストと重なってしまい、欠席しました）

小野 長嗣：9月に新海栄一さんに手伝っていただいて北海道の東部のクモ調査をしました。台風の直撃に会いましたが、例によって雨天決行。結果は来年の末に発表の予定です。

後藤 好正：今度横浜市港北区で“港北の生物誌（仮称）”を作ることになりました。会員の方で同地域のクモ類のデータ、文献をお持ちの方がいらっしゃいましたら、御一報下さい。

中島 祥吉：最近、人類最後の「ブラックボックス」脳に凝っています。何時か「心」のメカニズムが解明され、病気が理解・治療できるようになることを望んで。

梅林 力：本校の60周年記念行事のため、このところ毎日何かと忙しく暮らしています。なかなかひまが作れません。ワスレナグモが、減ってしまいました。どうしたのか理由は、わかりません（庭で、自然に）。来年はふえてくれることを願っています。今年はそういうえば、バルーニングも少なかったなあ。

宮下 直：今年は例年以上にジョロウグモの成長・発育が悪かったようです。最近5年間のデータから、降水量と統計的に有意な関係があることが判明しましたが、そのうちにどこかで発表する予定です。

笛岡 文雄：自室で飼育中のキシノウエトタテグモをどうやって越冬させるか、今思案中です。

谷川 明男：合同例会に出席します。

加藤むつみ：新しいVTRもとれましたし、多足類の会の方々にも見ていただいて脱皮についての御意見も、うかがいたかったのですが、VTR編集が上手な生徒には卒業されてしまいましたし、私が編集するのでは、どうも間に合いそうもなくなってしまいました。。。

木村 正吾：合同例会に出席します。

大久保光将：合同例会に出席します。

宮島 仁：合同例会に出席します。林聰彦と2名でお願いします。

笠原喜久雄：第3回の採集観察会の折りに、大悲願寺の石垣で捕らえたキノボリトタテグモを飼育しています。ワラジムシを餌として与えていますが、うまく食べてくれるか心配です。

久保田克哉：12月下旬までに本論を上げるべく日夜奮闘しています。同定に苦労しており、毎日のように「新種だー」とわめき散らしています。どうしても同定に自信がないものがあるので助けてください。

熊田 繁一：合同例会に出席します。

④ 脱皮ホルモン、つまりステロイドホルモンの影響で免疫力が低下しているのと思われる所以脱皮が近づいた飼育動物の環境はできるだけ清潔にし、すみやかにこの時期をやり過ごせるがよいのではないだろうか。そのためには、それ以前の良く食べるときの栄養摂取の工夫と、期の適度の加温と少々の加湿といった飼育管理が有効になるのではないか。加温はその時期の謝を早めるために、加湿は干渉液が早く乾くことにより、引っかかる出にくくなることを防ぐために。

< M. KATO >

会員移動

(入会)

宮島 仁:	〒221	神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢上町3-6 三ツ沢マンション305	045-322-0018
板倉 泰弘:	〒444	愛知県岡崎市伊賀町4-62-3 (再入会)	0564-22-2894
仲田 登:	〒168	東京都杉並区大宮2-5-19	03-3313-5244
伊藤 研:	〒211	神奈川県川崎市中原区今井西町167 大西ハイツ101	044-711-8910
浅枝 裕詞:	〒140	東京都品川区東大井4-10-4-B303 (小学3年生)	03-3471-9239
木村 正明:	〒157	東京都世田谷区上祖師谷1丁目22-11	03-3305-6661
高津 佳史:	〒110	東京都台東区下谷1-5-25 池田ビル302号	03-5828-8404
伴 潤:	〒215	神奈川県川崎市麻生区細山3-13-13	

(住所変更)

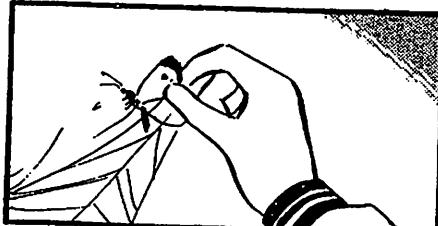
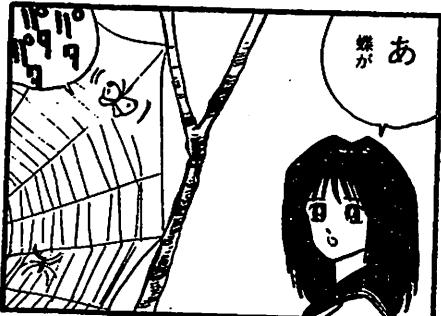
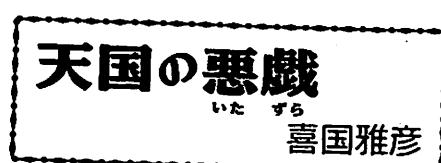
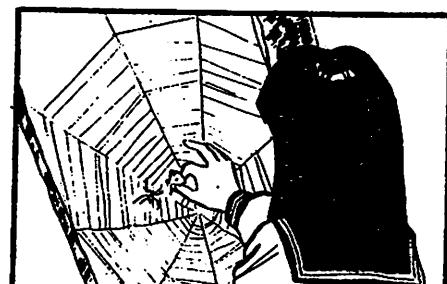
田中 徳久:	〒245	神奈川県横浜市泉区和泉町4228-3 サンメゾン201	045-805-4516
畠守 有紀:	〒520-221	滋賀県大津市瀬田3-1-5 SKハイツ303号	
下謝名松栄:	〒903	沖縄県那覇市首里赤平町2-13-2	
田中 一裕:	〒060	北海道札幌市北区北19条西8丁目 北海道大学低温科学研究所動物学部門	

(退会)

内田 善悟氏 (希望退会)

事務局(会員を含む) 〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199 熊田 慶一
領収証の必要な方は振替用紙通信欄にその旨お書きください。

訂正・変更等がありましたらお早めに事務局熊田までご連絡下さい。



1992
(H4-10-1. タリフジ) 提供
小澤実樹氏

会計だより

郵便振替口座 東京 7-74885 東京蜘蛛談話会

会費領
会員領

1992年10月~

(敬称は省略させていただきます)

1993年1月上旬 (一般2800円・学生2000円)

1990年(平成2年)度

下謝名松栄B092.

1991年(平成3年)度

下謝名松栄B092.

1992年(平成4年)度

宮島 仁B070・板倉 泰弘B071・神田 登B072・伊藤 研B073・米田 宏B074・浅枝 裕詞B075
木村 正明B077・高津 佳史B078・宮下 直B079・後藤 好正B080・新海 明B084・下謝名松栄B092
有田 立身B099・福本 伸男B104・伴 満B105.

1993年(平成5年)度

宮下 直B079・後藤 好正B080・前川 隆敏B081・小峰 光弘B082・畠守 有紀B083・新海 明B084
加藤むつみB085・徳本 洋B087・田副 幸子B088・谷川 明男B089・中島 晴子B090・鈴木 成生B091
下謝名松栄B092・鶴崎 展巨B093・永田 勝利B094・濱田 龍一B095・長井 劳夫B096・伊藤 研B097
大久保光将B098・有田 立身B099・増原 啓一B101・海老原憲昭B102・林 俊夫B103・福本 伸男B104
久保田克哉B106・佐久間良三B108・神田 登B110・山田三重子B111・田中 一裕B113・芦田 喜治B114
板倉 泰弘B116・鈴木 勝浩B117・早乙女 薫B119.

1994年(平成6年)度

緒方 清人B086・須賀 瑛文B112・田中 穂積B118.

1995年(平成7年)度

石野田辰夫B100.

会費の問い合わせには受付番号(B000)を明記
してください。

寄付

鈴木 成生氏・石野田辰夫氏・伴 満氏・田中 一裕氏.

バックナンバー代領収

久保田克哉氏・浅間 茂氏・徳本 洋.

会費の納入状況につきましては、宛名氏名に記入してある年号を御覧下さい。記入してある年号まで会費納入されております(1993年1月上旬現在)。会費は前納制ですので、まだの方はお早めに納入をお願します。

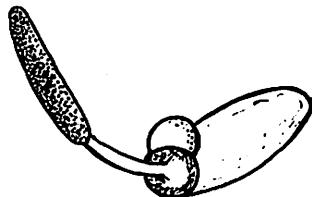
キシノウエトタテグモの幼体 をさしあげます。

- ☆ わたしは、キシノウエを飼育していますが、昨年に引き続き、1992年も幼体を得ることができました。現在、親グモと同居していますので正確な個体数はわかりませんが、200個体はいると思います。
- ☆ キシノウエトタテグモは、かなり飼育の簡単なクモで、しかも日本産のクモとしては、長生きします。オスは残念ながら短命ですが、メスは10年近くあるいはそれ以上飼育・観察ができるのです。そして、配偶行動・脱皮・捕食などの興味深い行動を見るすることができます。幼体を得ることもそれほど難しいことではありません。
- ☆ キシノウエは成体になると、夏から秋にかけて夜間住居を出てよく歩き回りますから、外に出たクモを採集して観察することができます。小さいのでオオツチグモほどの存在感はありませんが、手のうえにのせてじっくり見ることもできるクモです。
- ☆ キシノウエトタテグモの生態は、いまだよく分からぬ点が多いので、たくさんの方がこのクモを観察してさまざまなことを報告してほしいと思っています。
- ☆ 幼体を飼ってみたいと思われる方は、どうか下記までお電話かお手紙をいただきたいと思います。
- ☆ 飼育方法についても、出来る限りお教えいたしますので、ぜひご連絡ください。お待ちしております。なお、幼体のお渡しは、親グモの住居から分散し始める4月ころを予定しております。

〒 323 栃木県小山市 神鳥谷934-7-206 牧 孝匡
☎ 0285-22-7630

クモタケ (冬虫夏草) 一斉調査 アンケート用紙

クモタケ *Nomuraea atypicola* は地中性のクモ類、
おもにキシノウエトタゲモ *Latouchia typica* に
寄生する冬虫夏草の一種です（図参照）。梅雨の頃
に発生して誰でも容易に見付けることができます。
紀伊半島・四国・九州・山陰での分布や本州における
北限などはほとんど不明です。



アンケート調査に御協力下さい。

クモタケ

調査期間 1993年6月1日～7月31日。

このうち、7月4日（日）は一斉調査日です。

調査地 日本全国。 分布していないという情報も重要です。

調査方法 アンケート用紙に記入して下記に郵送して下さい。調査地が複数にまたがる場合は、お手数ですがこの用紙をコピーして調査地別に記入してください。

送付先 190 立川市錦町 3-12-16-1010 新海 明 ☎ 0425-22-2605

クモタケ一斉調査結果

（あなたの居住地付近にいなさいという情報も重要です。宜しくお願ひします。）

1. 調査期間中にクモタケを（ア、みつけた。イ、みつけられなかった。）
2. イと答えた方にお聞きします。付近にはキシノウエトタゲモがいましたか。（ア、いた。イ、いない。ウ、わからない。）

調査地を（わかる範囲で詳しく）お書き下さい。

都道府県

市郡

区町村

3. アと答えた方にお聞きします。①調査地を上に記入して下さい。

②調査月日は 1993年 月 日

③クモタケはどのくらいありましたか。（ア、1～10個 イ、11～50
ウ、51～100 エ、101以上）

④判る範囲で結構ですので、ホスト（寄生主）のクモの種類をお書き下さい。

（ ）

⑤その他お気付きの点がありましたら裏面に記入して下さい。

4. 調査者のお名前は（ ）

—————ご協力ありがとうございました。